

## トマス・アクィナスに於ける真理の問題

—『真理論』第1問、『神学大全』第1部、第16問—

渡部 菊郎

## 序

聖トマスは、『真理論』第1問に於て真理をものと知性との合致・対等 (adaequatio, conformitas rei et intellectus)<sup>(1)</sup>と定義している。また知性の働きは二つに分かたれるが、真理は主要第一次的な意味では「複合し分割する判断する知性の内にある」<sup>(2)</sup>と主張している。

小論の意図は、この二点を考察の中心に据え、この内容的にアリストテレスに由来し、<sup>(3)</sup>古来より様々な論争を呼びおこした「真理の定義」をテキストに即して考察してゆくことである。

## 1 有と真と真理

トマスは真理を定義する際、先人達の定義を、①真理の概念・本質 (ratio) に先立ち、その内に真のものが基づけられているものに即しての定義 (真のものは有るところのもの：アウグスチヌス)<sup>(4)</sup>②形相的に真の概念・本質を完成するものに即しての定義 ③帰結する果 (effectus) を表わすものとしての定義、という三側面から考察を加え、この三側面を共に含みもつものとして「ものと知性との合致・対等」を真理の定義としている。

①アウグスチヌスの定義の意味するところは、全ての「もの」は「有る」限り「真のもの」であるということであるが、トマスはこの定義を、真理の概念に先立ち、その内に真のものが基づけられているものの定義で、アウグスチヌスは、「ものの真理」についてのみ語っており、吾々の知性への関係を除外している (S. T. I, Q. 16, a. 1 ad 1) と言う。トマスの存在論的認識論にとって根本的なことは、i)

知性にまず最も知られたものとして捉えられるのは、「有(ens)」と「本質(essentia)<sup>(5)</sup>」とである、ii) 知性認識の全ての諸懐念は「有」へと立ち帰らせられ、「有への附加(additio ad ens)<sup>(6)</sup>」によって得られるという洞察である。

トマスの言う「有への付け加え」の意味するところは、個体(suppositum)としては同一な「有」に「有」という「名ざし言葉 nomen」によっては表明的には言い表わされていない「有の有り様(modus essendi)<sup>(7)</sup>」を概念(ratio)の次元で表明的に表現しているということであり、「真」とは「有の他の有への合致(convenientia)<sup>(8)</sup>」という有り様を言い表わしている。勿論、他の有としては「感覚と知性とによって可能的に全てのもの(可感的・可知的ものども)で有る有」「全ての有に合致するよう生まれついている有<sup>(9)</sup>」即ち魂が問題の中心に入ってくる。即ち真は「もの」の「知性」への合致・対等という概念(ratio)を有に附加し、又表現(exprimere)しているのである。トマスがアウグスチヌスの定義は、「吾々の知性への関係を欠いている」と言う時、逆からは、「真は有としてもものの中に基礎(fundamentum)を持ってはいるが、真や真理の概念の成立のためにはものも知性も共に参与しているのだ」と言っているのである。②第二の側面を表わすものとして形相的に(formaliter)真の概念を完成するものに即しての定義として「adaequatio rei et intellectus」をあげているのはそのためである。トマスの言わんとする所は、確かにものの存在性(entitas)は真理の概念に先立ってはいるが、認識はものと知性と合致・対等化という真理を基にした真理の果(effectus)<sup>(10)</sup>なのである。即ち、真のものは個体としては有と同一のものではあるが、「真」はあくまでも認識(cognitio)との関係から、知性の側を根原として語られるし、又真は概念であるから知性の内に在るものである。というのは、認識という働きは、認識されたものの形象が「認識するものの中に在る<sup>(11)</sup>」限りに於てあるからである。認識という動の終局は知性の内にある。「真」は知性の働きゆくところの名称であり、真は知性が知性認識されたものに合致する限りに於て知性の内に在るのである。第二の側面に関して言われた定義は、形相的に認識の根底にあり、認識を成立させ、「真」の概念を完成するものと言っているのである。

## 2. ものの真理

さて、既に見たように、トマスは、ものは知性を根原として知性に比較される限り「真のもの」であると言っているが、<sup>(12)</sup> i) ものは全て本質 (essentia) とエッセ (esse) とからなるし、ii) 根原として比較される知性も、神の知性と人間の知性がある。従って「ものは知性を根原として比較 (comparare) される限り真のものである」とか「ものと知性との合致」ということも多方面から考察されうる。

#### i) 外在的真理 (veritas extrinseca) から

ものは、そのエッセの依存する神そのものである第一真理の分有によって、神を尺度として自体的・本質的に真のものである。<sup>(13)</sup> この観点からすれば、実在するもの、例えば石に関して言われた真理は、その概念の内に石の存在性 (entitas) を含み持っている。ものは神の知性を根原として固有な形相 (forma) を持ち、その形相によって各々のものは「真のもの」としてエッセを所有する。その意味では、被造物の内に見出される真理はものの存在性 (entitas) であり、ものの、そのエッセの原因である神の知性への合致である。<sup>(14)</sup> 即ちものは神の知性に秩序づけられ、その固有な本性の形相やアイデアが見出される神の知性の内にある形相を充たしている限り「真のもの」と言われる。しかしながら、その際ものは神の知性に即そのものに内在する真理なのではない。例えば石は、その形相によって神の知性を根原として、神の知性に合致した存在性を含む限り端的に「真の石」である。

#### ii) 内在的真理 (veritas intrinseca) から

他方、ものは、ものに内在する形相によって、吾々の知性に合致されうるエッセを持っている。<sup>(15)</sup> この観点からすれば、ものは人間の知性の内に真なる把捉を形成しうる「もの」であり、この点に於ても「真のもの」と言われる。ものは、自らに内在する存在性によって、人間知性を自らに合致させるのであり、ものの方が原因づける「知性への関係」を付け加えている。しかしながらこの場合、ものは自らが自らについて、人間の知性に真なる把捉を形成するように生まれついている限りでは、「真なる把捉」を帰結させるという意味で (effective) 「真のもの」と言われるのである。

以上の考察から判るように、神の知性、人間の知性、どちらへの関係をみても、ものの「何性 quidditas」や「本質 essentia」ではなく、ものエッセ、存在性がものの真理に関連して語られているのである。というのは、ものの知性への関係と

言っても、人間の知性より神の知性への比較の方が先であるから、である。しかし、そうだとすると、人間知性との関係を考えると、真理は先なる仕方ではものの内に内在 (inesse) することになろう。とすれば、人間知性との関係からは、真や真理は先なる仕方ではものの内にあることになり、トマスの主張と異なってくる。

この異論に対してトマスは、(Q. 16, a. 1 ad 3) 真なる把握はものに原因づけられはしても、「ものの真理 veritas rei」が原因づけるのではなく、「もののエッセ<sup>(16)</sup> esse rei」が原因づけると答えている。即ち、ものが吾々人間知性との関連で真のもの、偽のものと言われるのは本質的又形相的ではなく、帰結させるという意味 (effective) である。③従ってトマスは真理の第三の側面を表わすものとして、ヒラリウスの「真とはエッセを表明し、願わにするもの verum est declarativum aut manifestativum esse<sup>(17)</sup>」という定義を、「合致から帰結する果」を表わすものとしているのである。

### 3. 真理 (veritas) の有り処

次に「知性の内に有る」「知性ともとの合致」という真理の定義の意味するところを、「認識」の側面から、真理の把握という側面から考察してゆくことにしよう。

人間の認識は感覚 (sensus) に始まり、知性認識 (intellectus) に於て完成されている。そして、全て認識は、認識するものの認識されるもの (res cognita) への類同化によって完成される。その際認識力は、認識するものに於て、その類似によって自己が形相化されるものに関してはあざむかれることなく常に「真」である。<sup>(18)</sup>

例えば感覚は、その形象によって魂の外の実在するものに合致 (conformare) され、現実的な感覚となる時、その感覚は「真」と言われる。単純把握 (simplex apprehensio) する知性も、それが「認識するもの」である限り、認識するものである限りの自らの形相である「認識されるものの類似」を持つ限り真で有る。しかしながら両者の場合、合致され、対象の形相を自らの内に含んでいる限りに於ては、ものとの「合致 conformitas」は成立しているが、「認識されたものとしての真<sup>(19)</sup> verum ut cognitum」としての真理はまだ成立していないので、「もの」としての感覚、「もの」としての「知性」の真理に留まっている。というのは、感覚や単純

把握する知性は、もののエッセや、又ものと自己との関係を捉えたりはしていないからである。つまり、感覚やこの段階の知性は一つの「もの」として「可感的なものの *res sensibilis*」「可知的なもの *res intelligibilis*」の形象 (*species*) を受け取る限りに於てものの類似 (*similitudo rei*)<sup>(20)</sup> を持っており、知性に対して真なる見解 (*vera existimatio*) を形成しうる「真のもの」に留まっている。しかし、自己とものとの合形相性 (*conformitas*) や自らが「真で有る *est verus*」<sup>(21)</sup> ことを認識している訳ではないからである。

#### 4. 知性と感覚との「もの」への関係

次に、「真理が主要第一次的な意味では、複合し分割する知性の内にある」というトマスの主張を更にテキストに即して考察しよう。

i) 『真理論』に於ては、「合致 *adaequatio*」は異なるものの同士の間に成立する関係であるが、知性は複合・分割する時知性に固有なもの (*proprium*) を持ち、「知性が既に把握したものについて判断しはじめる時、知性の判断は知性に固有で魂の外には見出されない。……判断は魂の外のものの中にあるものと合致する (*adaequari*) 時真で有る」と言っている。

ii) 『スノマ』では簡潔に「知性が、そのものについて自らが把握する形相 (*forma*) の有るように、そのようにものが有ると判断する時、知性は初めて真を認識し、語<sup>(22)</sup>」と述べているが、知性は「複合・分割」によって自己の可知的なものに対する合形相性 (*conformitas*) を認識できる。この合致の認識が真理の認識であり、それは又知性の完成 (*perfectio*)<sup>(23)</sup> であると言っている。

以上二箇所の考察から、「ものと知性との合致」ということは二段階に考えられていることが判る。即ち i) まず、ものとしての知性の真理、即ち知性自身の可知的なものとの形象・形相の合致(勿論、エッセや本性 *natura* の合致ではない)

ii) それを基にして、その果 (*effectus*) として、その合致自身の認識、即ち本質や形相の把握を基にして、そのような形相が「ものの内に有る *esse in re*」か否かの認識。これは即ち判断 (*judicium*) であり、ここに於て知性に固有な働き、即ち判断ともとの合致 (*adaequatio*) の認識が成立する。そしてそれは知性の善・完全性なのである。ここに於て、即ち「複合し分割する知性」に於て「認識された

ものとしての真 *verum ut cognitum*」が見出されるのである。「もの」や「ものである限りの感覚・知性」は、いわば「判断」に対して質料的側面としての役割を果たし、「判断」との関係から「真」や「偽」とも言われうるのである。<sup>(24)</sup>

次に「知性」と「もの」との関係の考察に入ろう。「人間の知性は必然的に複合・分割しながら知性認識しなければならない (I, Q. 85, a. 1)」のであるが、先に述べたように、知性にまず最初に入ってくるものは有と本質とである。

知性が単純把握によって捉えた本質・形相が「ものの中にエッセするか」しないかを判断するところに知性に固有なものが生ずる。

そしてここには、知性自身による、知性の懐念 (*conceptus intellectus*) とものとの比較 (*comparatio*) がある。

この点をもう少し詳しく考察してみよう。『命題論注解』に於てトマスは知性の懐念即ち魂の情態 (*passiones animae*) を二様に考察している。<sup>(25)</sup> 即ち、例えば彫刻が銅でもあり、又人でもあるように (*Peri Herm.* n. 26)。

i) 自体的に考察するならば、諸懐念は魂の外のものとは実在的に (*realiter*) 異なっており、ものとしての知性と同様実在的エッセ (*esse reale*) を持っている。<sup>(26)</sup>

ii) 懐念がその類似であるものの内容 (*ratio*) に関して考察されるならば、この場合はイデアールな内容 (*ratio*) を持っており、志念的エッセ (*esse intentionale*) を持っている。<sup>(27)</sup>

i) の様式で考察するならば、常に複合 (*compositio*) がある。即ち、単純把握は不可分なもの (*indivisibilia*) を知性認識する働きである。例えば「ソクラテスが坐っている」という「もの」を考えてみれば、知性の第一の働きは、「ソクラテス」「坐っている (*sedens*)」を別々に知性認識する。しかし第二の働きによって、複合し、一つの可知的なものが生じ、知性は更に「現在」そうであると時をあわせ知解 (*co-intelligere tempus*)<sup>(28)</sup> する。そのようにして「S-P est」という複合懐念を形成する。ここでは知性が単純懐念を他の懐念と比較し、懐念同士を複合する。

特に問題となるのは二番目の複合・分割である。即ち、魂の外のものとも、ものとしての知性とも異なる判断と、魂の外のものとの比較である。この際、複合とは、知性がその懐念である「もの」の「結合や統一性」を把握することである。即ち、ものに於て「一にして複合されたもの *unum et compositum*」<sup>(29)</sup> であるものを複

合する (S-P est) ことであり、分割は「懐念」がものに於て異なる (diversa) と把握することである。ところで、知性がこのような「比較」即ち「判断」をなすことのできる条件としては、i) 先に述べた「単純把握に於ける合致」は勿論のこととして、ii) 知性自身の自己自身への反省・還帰 (reflexio, reditio) という構造<sup>(30)</sup>をあげることができよう。

即ち、ものに於ける本質とエッセとの区別は知性の二つの働きに対応しているが、知性の統一した働きとして両者は不可分に結びついており、認識を成立させているのである。

知性の本性はものと合致 (conformare) することにある。即ちものに於ける「一にして複合されたもの」を知性は単純把握に於て分析的に捉える——第一の「ものと知性との合形相性 (conformitas)」がここで成立する。更に知性は懐念相互の複合をなし、自己自身の認識＝還帰によって「複合・分割」する、即ち知性は自らが認識することをも認識し、自らの作用の本質を認識する。即ち知性自身のものへの関係・合致を認識する。それは知性が自己自身の本質へ還帰 (redire) することであるが、この自己自身への還帰という構造に於て、第一の働きに於て捉えた形相が「ものの内にエッセするか否か」という判断が可能になる。そして、ここに於て、もの即ち本質とエッセとからなる有と知性、即ち単純把握による本質の把握と判断によるエッセの把握とからなる知性との合致 (adaequatio) は完成され、知性はものを認識し、認識の真理を認識するのである。

## 5. 判断とエッセ

次に『命題論注解』に於けるトマスの考えに従って、複合・分割＝判断ということのエッセとの関係に特に着目しながら考察を続けてゆくことにする。

名ざし<sup>(31)</sup>言葉も述べ言葉<sup>(32)</sup>も命題的文<sup>(33)</sup>も知性の懐念を表現するために発声 (profero) され、その印なのであるが、その内に真や偽のある複合懐念を意味表示 (significare) するのは複合懐念を意味表示する命題的文であり、それは「全体構成部分 pars integralis」として名ざし言葉と述べ言葉とよりなる。例として「ソクラテスは坐っている Socrates sedet, Socrates est sedens」という命題を考えてみよう。

トマスは、判断に於て「知性は全て、命題に於て述語 (praedicatum) によって

意味表示される何らかの形相を、主語によって意味表示される何らかのものに適用 (applicare) し、又はそこから除去 (removere)』すると言う (S. T. I, Q. 16, a. 2)。

音声の次元で考える場合、ソクラテスは主語の位置、坐っているは述語の位置に置かれている。しかし「命題的文」の「全体」で考える時、「S-P est」は別々に考えられているのではない。命題が意味表示するのは全体としての複合懐念 (S-P est) である。たしかに名ざし言葉「ソクラテス」は個物を示す。しかし、「ソクラテス」という名ざし言葉の意味表示するもの (Sの単純把握) と、命題に於て「あるもの」を意味表示するために、それによって名ざし言葉の導入されるものとは異なる<sup>(34)</sup>。即ち、命題的文の構成部分となっている名ざし言葉は、複合懐念の部分を意味表示している。即ち、端的に「ソクラテス」を意味するのではなく、「坐っている」がソクラテスに内属するように意味表示している。同様に述べ言葉「坐っている sedet, est sedens」も自体的にはただの名ざし言葉であるが、命題的文に於ては、「ソクラテス」の現実態に於ける有り様を、即ち、ソクラテスという主語・基体に内属する何らかの形相の現実態の様態を意味表示している<sup>(35)</sup>のである。そして更に「ソクラテスは坐っている」に於ては「坐っている」という述べ言葉が述べられることによって「命題的なことがら enuntiabile」としての複合懐念の意味表示を完成するような「複合」が導入される。即ち、「ソクラテスは坐っている」という命題に於ては、述べ言葉は、「自体的な名ざし言葉ではない主題によって意味表示されるもの〈坐っているソクラテス〉の本質・形相が現実的に有る (in actu esse)<sup>(36)</sup>」を意味表示している。知性は有のエッセの現実態を、時に於て測られたものとして意味表示するのである。「S est P」の「est」ポルフィリウスやアンモニウスの解釈したように普通コブラと名ざされる「EST」は、主語 (基体) に現実的に内在するいかなる形相であれ、その形相の現実態 (actus) を意味表示している。しかしこの「EST」は、単に発声された「S」と「P」とを連結したり、まして書き記された命題文の連結詞などではない。むしろ、本質とエッセとからなる有を示すものとして、S-P なしには理解されない複合を、即ち全体としての有を、それもその内で命題的事柄が真か偽かを意味表示することを完成する複合ともどもに意味表示するのである<sup>(37)</sup>。従って、その複合は「真理的複合」とも呼ばれよう。



トマスに於ては、以上のように、真理の有る処、即ち認識の完成する知性は又、  
もの(38)の形相のものの中のエッセの現実態を開示する場であると言えよう。

## 結 語

しかし、「真理の定義」は、トマスの体系の内では、「神の知・アイデア・御言葉論」の流れの内に位置づけられる。「合致」という一見簡単な真理の定義の含み持つ意味が聖トマスの体系の中で、そして又、西欧哲学史の中でどのように変転してゆくのか、を深く探求すること。それは筆者の今後の課題である。

## 註

- (1) *De Veri*, Q. 1, a. 1; *S. T.* I, Q. 16, a. 1.
- (2) *De Veri*, Q. 1, a. 3; *S. T.* I, Q. 16, a. 2.
- (3) この定義自身の歴史的考証に関しては、『神学大全 2』(高田三郎訳) S. 342~343, 「存在の真理と判断の真理」(江藤太郎著、『現代存在論』S. 125~126) に詳しい。
- (4) Augustinus, *Solil.* cap. V. “verum est id quod est.”
- (5) *De ente et essentia*, Prooemium 1.
- (6) *De Veri*, Q. 1, a. 1
- (7) *De Veri*, Q. 1, a. 1; *S. T.* I, Q. 16, a. 3.
- (8) *ibid.*
- (9) *ibid.* “aliquid quod autem sit cum omni ente.....”; *De anim. Commentarium*, L. III, L. XIII. “anima est quodammodo omnia.....”
- (10) *De Veri*, Q. 1, a. 1 “ad quam conformitatem sequitur cognitio rei.....”
- (11) *S. T.* I, Q. 14, a. 1.
- (12) *S. T.* I, Q. 16, a. 1.
- (13) *De Veri*, Q. 1, a. 5.
- (14) *ibid.*
- (15) *ibid.*
- (16) *S. T.* I, Q. 16, a. 1 ad 3.
- (17) *S. T.* I, Q. 16, a. 1; *De Veri*, Q. 1, a. 1.
- (18) *De Veri*, Q. 1, a. 11. *sensus* や *simplex apprehensio* の内には *proprie* には *veritas* や *falsitas* はない。*formatio*, *iudicium* への *ordo* からのみ言われている。*organum* や *medium* の内にある *impedimentum* が無い限り、常に

「真」である。なお、(S. T. I, Q.17, a.2) *communia sensibilia* や *sensibilia per accidens* については、*dispositio* が *rectus* であっても *sensus* の内に *falsum indicium* が有る。この点に関して「発表」の際、加藤信朗・松永雄二両先生より、鋭い御指摘があった。筆者は、プラトン *Theaetetus*, *Sophistes* 又、デカルトとの比較に於て、更にこの「問題」を掘りさげている。

(19) S. T. I, Q.16, a. 1.

(20) S. T. I, Q.17, a. 2.

(21) *De Veri.* Q.1, a. 9.

*Peri Hermeneias Expositio*, L. III, n. 31.

(22) S. T. I, Q.16, a.2. “quando iudicat rem ita se habere sicut est forma quam de re apprehendit, tunc primo cognoscit et dicit verum.”

(23) *ibid.*

(24) *De Veri.* Q.1, a.11. S. T. I, Q.17, a. 2 ;

*Peri Herm.* L. III, n. 31.

例えば *sensus* は、*sensibilia* の *species* を受けとり *similitudo rei* を持っている限りに於ては知性に対して *propria dispositio* についての「真なる」見解を常に *formare* する「真のもの」である。しかし、ものの *repraesentativum* として *sensus* が見られた場合には、*sensus* はものと知性との関係に於ける媒介者として働き、「偽なる黄金」のように「偽」となりうる。前註(18)参照。

(25) *Peri Herm.* L. II, n. 15, 16.

(26) *Peri Herm.* L. II, n. 15, 16 & L. III, n. 26 ;

*De Veri.* Q.4, a. 1.

(27) *ibid.*

(28) *De anim. Commentarium*, L. XI, n. 748, 749.

(29) *ibid.*

(30) *De Veri.* Q.1, a. 9. 稻垣良典「判断と真理」(『聖トマス学院論叢』S. 227 ~253) にアウグスチヌスとの比較が詳しい。

(31) *Peri Herm.* n. 37 inf. “nomen est vox significativa secundum placitum, sine tempore, cuius nulla pars est significativa, separata...”

(32) *Peri Herm.* n. 53 inf. “verbum est quod consignificat tempus, cuius pars nihil extra significat, et est semper eorum, quae de altero praedicantur, nota.....”

(33) *Peri Herm.* n. 83 inf. “enuntiativa non omnis, sed illa in qua verum vel falsum est.....”

- (34) *Peri Herm.* n. 44.
- (35) *Peri Herm.* n. 73.
- (36) *ibid.*
- (37) *ibid.*, n. 72. M. Heidegger に従い、veritative Synthesis (*Kant und das Problem der Metaphysik*, S. 34.) と呼びうるかも知れない。vgl. B. Lotz, "Das Sein und das Urteil" S. 62.
- (38) Hans Meyer, "Thomas von Aquin" zweiter erweiterte Auflage, S. 438.